第３４号　2012年１２月１日

カトリック仙台司教区・ カリタスジャパン
東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

福島・原町教会の「さゆり幼稚園」に室内遊び場ができたというううれしいニュースと、仙台教区滞日外国人支援センター開設１周年記念コンサート、岩手沿岸４ベースの協力で行われた「第７回宮古教会分かち合いマーケット」と、これも多くの教会の協力によって成功した福島・いわき教会の「平・堂根チーム」による炊き出しの模様をお知らせいたします。

南相馬復興のシンボルに
さゆり幼稚園　室内遊び場落成

福島県南相馬市のカトリック原町教会に隣接している「さゆり幼稚園」で、10月５日「室内遊び場落成式」が行われました。落成式には、南相馬市長・桜井勝延氏、建設関係者、保護者会会長、さゆり幼稚園・顧問、カリタスジャパン援助部会秘書・成井大介神父など、少数の人を招いての小さな落成式でしたが、それぞれの人が、心から「さゆり幼稚園」のことを思い、関わってこられただけに、本音で語られた温かい式典でした。

さゆり幼稚園は、福島第一原発事故以来すっかり変わってしまいました。それまで園児が85人いましたが、７ヶ月間園児を迎え入れることができませんでした。しかし、除染作業をしたり、やれる努力に全力を尽くし、やっと、幼稚園再開にこぎつけました。園児も０人から今では21人に増えました。しかし、残念なことに、５人いた先生は３人になりましたが、この苦難の道を共に歩いてきました。

まず、喜びの挨拶を、園長のラトゥール神父は、次のように語りました。「原発事故の後、私たちは、創設から60年たっているこの幼稚園が、以前と同じように地域の中でどのように使命を果たしていけばいいのかと考えました。そこで、考えたのは、外で遊ぶことのできない子どもたちに、砂場付室内遊び場があればいい、砂場がほしい、と思いました。しかし、経済的な力が足りません。奇跡を求める以外実現しそうにもない夢のように思いました。この夢が実現したのは、カリタスジャパンの力があったからです。改めて心から感謝いたします」。

続いて、保護者会会長が「自分の子どもも外で遊ばせることができないつらさを味わいましたので今日は本当にうれしい」と挨拶。工事経過は、原町教会、幼稚園を施行し、ご自身も卒園生という庄司建設副社長が報告。園児が減少して、空いた３部屋のうち２部屋を砂場にし、１部屋を板の間の遊び場にし、各部屋の斜交いをジャングルジムのように、園児が遊べるように工夫した、と説明。その後、感謝状がカリタスジャパンと庄司建設に手渡されました。

来賓祝辞として顧問の渡辺恭伸氏は、3.11以降の園長と先生方の苦労について話し、「この『砂場付室内遊び場』を南相馬市復興のシンボルとしよう」と明るい希望を表明され、来春卒園予定の園児３人の、「砂場を作ってくださって、ありがとうございました」というかわいらしい挨拶に、参加していたみんなも、思わず拍手、拍手、拍手。主任の蒲田先生が感謝の言葉と、この砂場を地域の子どもたちにも開放する予定であること、幼稚園の終わった後の時間をそれに当てることを発表し、拍手のうちに落成式を終わりました。

その後、砂場に行き、来年卒園する３人の園児が砂場に入り、遊び始めました。その様子を見ていた来賓もお客様も、童心に返り、一緒に砂遊びを楽しみました。久しぶりの砂遊びに夢中になり、園児がいつまでも砂場で遊んでいる姿を見て、砂遊びが幼児の健全な発達上、必要不可欠なものという先生の言葉が思い出されました。

【落成式当日】　来年卒園予定の３人が、さっそく砂遊び♪

【現在】　大喜びで砂場に入り、遊ぶ子どもたち

第７回宮古教会分かち合いマーケット開催

９月 30 日、台風 17 号の影響が心配されたこの行事でしたが、どっこい好天に恵まれ、開始の４時間前から並ぶ人もあるほどに人気はすっかり定着している様子です。

教会に全国から寄せられた支援金を原資に、寝具類、お米、各種野菜、調味料、日用品ペーパー類等が格安で提供されました。また、今回は岩手県沿岸４ベースも揃い、各道県特産メニューが来場者にこれまた格安で提供されました。

宮古教会の信徒は 20 人ほどですが、毎回盛岡の教会、千葉県茂原教会の信徒の方が助っ人に駆けつけてくださいます。この方たちの協力なしには運営はできません。本当に感謝です。

ほかに、これまで残っていた中古衣類や日用品もたくさん並べられましたが、多くの方が品定めをされ、こちらは無料でお持ちいただきました。掘り出し物を見つける楽しさを味わっていられる方が多かったのでしょうが、まだ支援が十分とは言い切れないのかとの思いもよぎりました。

「宮古産業まつり」という大きなイベントと重なったにもかかわらず、約 300 人の方が来てくださいました。格安のお米がお目当ての方すべてに行き渡らなかったことは、心残りでした。

普段、移動カフェでお邪魔しているたくさんの仮設住民からも声を掛けられ、喜ばれたのは嬉しい限りです。

今回の「分かち合いマーケット」は、第７回目でしたが、今回初めて、岩手県沿岸４ベースの方々と一緒に炊き出しイベントも行いました。宮古ベースはいつものように「ジンギスカン」、大槌ベースは「長崎ちゃんぽん」、釜石ベースは「ホットドッグ」、大船渡ベースは「たこ焼き」と、それぞれの地域性を出した食べ物で、みなさんに大好評を博しました。各ベースが準備した「約 100 食」「200 食」は、いずれも完売で、手伝ってくださっていたボランティアの方々もホッとした表情でした。

沿岸４ベースの合同行事もちょうどこれで一巡しました。４ベースはこれまでにも定期的に集まって情報交換、協議をしてまいりました。今後もまた、必要な支援について知恵を出し合って、岩手沿岸支援を考えていきます。

カリタス宮古ベース　スタッフ
和田　真一

仙台教区滞日外国人支援センター 開設一周年記念式典

11 月 18 日､仙台教区滞日外国人支援センターの１周年記念のコンサートが上智学院・仙台教区滞日外国人支援センター主催、カトリック大船渡教会・CTIC（カトリック東京国際センター）協力のもとに行われました。上智大学の創立 100 周年を記念してマニラから来日した、Jesuit Music Ministry（JMM/イエズス会音楽局）の Himig Heswita（イエズス会士のメロディ）が、東日本被災地復興支援のため、コーラスの Himig Koenji （六本木チャペルセンターで奉仕している聖歌隊）の 14 名の方々と共に「歌で祈りを！」と大船渡でコンサートをすることになりました。

Himig Heswita は、フィリピンで教会音楽やヒーリングミュージックなどを通して多くの支持を受けている５名グループです。そのうちの３名は、アーネル神父・ピーター神父・フロージュ神父というイエズス会の司祭です。

コンサート前、小教区の皆さんとミサを捧げ、説教の中でピーター神父が「『終末は希望へのメッセージである』津波のあとのここも同じであり、つねに『キリストが共に歩んでおられる』」と、印象深いメッセージを話してくださいました。

ミサ後、海の星幼稚園でコンサートが行われ、80 名ほどの人が集まり、中には七五三の着物を着た子供の姿もありました。また、コンサート前には大船渡・陸前高田にいるフィリピンの PAGASA（希望）グループが作ったフィリピンの料理も並び、被災したフィリピンのお母さんたちを支援する奇跡の一本松がデザインされた PAGASA　IWATE の T シャツも販売されました。

アーネル神父のピアノが奏でるメロディーにのせ、タガログ語と英語の歌に聞き入り、中には涙を流しながら聴く人の姿も見られました。幼稚園のホールいっぱいに彼らの優しい癒しの歌声がひびき、歌を通して皆がひとつになり、苦しみを乗り越え、希望を与えるひと時となりました。

コンサートに参加した人々は、「もっと、多くの人に聞いてもらいたかった」と残念そうに話していました。

{写真説明}
80 人の聴衆を前に、自分たちの歌う聖歌が、被災者の心に届くように心を込めて歌い、演奏するイエズス会士たちと、聖歌隊のメンバーたち。

仙台教区滞日外国人支援センター
林　愛子

いわき教会「平・堂根チーム」炊き出し実施

皆さん、もうすぐ
炊き出し＆イベントが
はじまりま～す！

福島県沿岸沿いの南部に位置するいわき市は、人口、面積においても、東北地方では仙台市の次に名前が挙がる大きな市です。この市も東日本大震災の時には、死者430人を出し、９万戸が大きな被害を受けました。

いわき市には、たくさんの仮設住宅が建てられていますが、同じいわき市で支援活動をしている、さいたま教区のいわきサポートステーション「もみの木」は、主にいわき市以外の地域からの避難者が入居している仮設住宅への支援を担当し、いわき教会の「平・堂根チーム」は、いわき市の津波被災者への支援活動を続けています。

内郷の雇用促進住宅に入居された被災者245世帯の方々のために、月２回お茶のサロンを開き、年２回炊き出しイベントをすることに決め、「平・堂根チーム」のスタッフを中心に、いわき教会のメンバーも協力し、被災者の方々の心に寄り添ってきました。

月２回のお茶のサロンを続けているうちに、被災者の方々から「私たちも手伝いたい、サービスを受けるだけでなく、何かやりたい」という声があがり、今では、お茶を入れたりすることを手伝ってくださっています。

大人気の焼きそばには、
長蛇の列が出来ていました

11月11日11時40分～14時、内郷雇用促進住宅前の広場で行われた炊き出しには、いわき教会だけでなく、いろいろな地域の方々の協力がありました。まず、被災者の方の「鮭のちゃんちゃん焼き」と３日間煮込んだ「玉こんにゃく」、横浜教区大和教会のフィリピン人、ペルー人、ブラジル人の共同体、そして日本人の４グループ28人で、チャーターしたバスに乗り、早朝５時に大和教会を出発して、11時には「ホットドッグ」「チーズパイ」などの準備を楽しそうに始めました。会津若松教会の有志グループにダルクのメンバーも加わった「赤べこ」チームは、焼きそばを豪快に作り、綿あめも提供しました。さらに、シャルトル聖パウロ修道女会は、仙台の２つの修道院から８人のシスターが参加し、和菓子といなり寿司を作って来てくださいました。そして「平・堂根チーム」は、ジュース、コーヒー、そしてご飯とお漬け物が添えられた「サンマのつみれ汁」のはずだったのですが、注文したお魚やさんの手違いで、サンマではなく、「白身魚のつみれ汁」となってしまいました。お味のほうは、どこのテントの食べ物も大好評でした。

11時40分を待ちきれないように、まず、子どもたちが集まりはじめました。自治会長・大河内喜男さんの挨拶、平賀徹夫司教の挨拶で始められました。

自治会長さん

子どもとじゃんけんをする平賀司教

室内のホールでは、「赤べこ」による飯豊権現太鼓が勇壮に２曲打たれ、続いてペルーの民族ダンスを、きれいな民族衣装を着た子どもたちが楽しそうに踊りました。最後がシャルトル聖パウロ修道女会シスターたちの「すずめ踊り」。

参加者たちもみな、太鼓や踊りを楽しみながら食事をし、大満足でした。すべてのものが完売し、少し早めに後片付けが始まりました。

炊き出し奉仕に当たった70人は、最後に、いわき教会に戻り、平賀司教様の感謝のミサに参加しました。司教様は、「１年８ヶ月前、東日本大震災で亡くなられた方々、そのご遺族、災害を被った人々といつも連帯したい、私たちはいつもあなた方とつながっていたい、神はどんな苦しいときも見捨てられる事はない、神はいつもわたしたちを支えてくださる方です。この思いを、私たちは今日、炊き出しで表しました。……私たちのできる精一杯のことをしたのです。これを神様にささげましょう」とミサで語られました。

参加した全員がイエスの言葉と体に養われ、力づけられ、再会を約して散っていきました。

うれしいお知らせ

仙台教区サポートセンターの「**福島デスク**」ができます。
詳細は次号でお知らせいたします。